

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第三十一章

Hostage rescue

— 人質奪還 —

峯村 明

目次

Hostage rescue	
お願い	2
登場人物	3
Witches	5
Hostage rescue	11
あとがき	18
奥付	19

Hostage rescue

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年08月17日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
A.パウジーニ	桧山健の個人秘書
サーディク	H & L 財団・芸術部門責任者 エドミールのステージネーム
ボディーガードX、Y	サーディクの護衛
ウィンディ・サトウ	H & L 財団・法務部勤務
竜門洑 優美子	

cast31.JPG

Witches

300.

エレベーターには先客がいた。女性で、つきあたりの壁に背中をつけ、顔の前にスマホをかざして顔が見えない。女が動画を撮影しているのだと気がついたYは、とっさにユミコの腕をつかんで引き戻した。その時にはもうエレベーターの扉は閉まり、下降が始まっていた。

「あらあ」と女は笑い声で言い、スマホをおろした。

（ウィンディ・サトウ！）Yは自分の頭を殴りつけたくなった。先回りされていたとは！

「んふ……今日は女性をご同伴なのねえ。いつもの仲良し三人組じゃなくて」

「——」

「んふふ……この女性^{ひと}は、ご主人のカノジョ^こでしょう？ いいのかしら、昼間っからこんなことしてて、三人の仲にひびがはいるんじゃない？」

二重三重の揶揄。

「どなたか知らないが、根拠のない侮辱は犯罪だぞ」

ウィンディは、のけぞるようにして、ぷっ、と噴いた。「あたしはねえ、法律の専門家なの。なにが犯罪でなにがそうじゃないくらい、ちゃあんと知ってますって。くすす……知ったかぶりはやめてね」

それからYの背後にかくまわれたユミコをわざわざのぞき込み、「あなたねえ、彼ら三人組はとっても仲良しの、意味、わかる？ 知ってた？ 男三人よ？ くすすくすす……さ、今撮った動画、子ども相手にお仕事中の二人に送ってあげるわね——」

するとユミコは果敢に声をあげた。「貴女は財団の職員なのでしょ？ こんなことが発覚したら、お仕事に支障がでるではありません？」

「あらっ。あたしとしたことが気がつかなかったわ！　でもね、そんな心配はいらないの。だってあたしは休暇の途中で財団をおさらばしちゃうから～」

なんつー女だ、とYは呆れていた。この女は用意周到のようできてとんでもなく抜けてるんじゃないかという考えが頭をもたげてくる。ここへ来ていることはマスターの指示なのだから動画を送りつけるなりなんなりするがいい。むしろ、ちゃんと仕事をしている証拠になるというものだ。

女は片手でスマホを操作しながら片手で金の鎖をちゃらちゃらと弄んでいた。鎖の先はバッグの中に隠れているが、一瞬、何かに繋がっているのがYの目に映った。（——USB??）

その時、エレベーターの降下速度が落ちた。誰かがエレベーターを呼んで乗り込もうとしているらしい。だから——ほんの数秒のことだった。

とつぜん、ウィンディの背後に、金色のもやのような揺らめきが起こった。Yは目の錯覚かと思った。はっと瞬きする間に金色のもやは人の姿をとった。ユミコもおなじものを見ていて、はっと息を止めた。

金色の人型は“手”を伸ばしてきてウィンディの背後から彼女の口をふさいだ。仰天したウィンディは目を剥いて暴れるがあっという間にくずおれた。

人型は言った。「従者よ」、と。「主^{あるじ}に伝えよ。死神が仕えているのは冥界王ではないと」重く震えるような声。

Yは背後で扉が開くのを感じながらあわただしく尋ねた。「名前を！　聴かせてくれ！」人型はウィンディを抱えた態勢でウィンディごと消えていく。

最後に声が残った。「シパド」、と。

301.

ワークショップは午後三時で終了した。普段ならその後個別の質疑応答や個人レッスンに応じるところだが、今日はすべて無し。生徒たちはがっかりしたが、今日はゆっく

り休養を取るよう言い聞かせる。のちに振り返ればそれは虫の知らせだったのかもしれない。

全員それぞれの部屋へ引き上げたことを確認して、サーディク先生はユミコの部屋へ走った。Yからあらかた報告を受けていたけれども、詳しい話をきかなければならなかった。Xを見張りのために廊下へ残し、Yを伴って入室する。部屋には財団の女性スタッフがいてユミコと話をしていた。若い女性スタッフはサーディクとYにお茶を淹れ、用があったら呼んでくれと言って退出した。

「至れり尽くせりですわね」ユミコは感嘆のため息とともにそう言った。荷物を部屋まで運んでくれ、今は世間話をしていただけという。予約していたホテルを引き払ってこちらへ移ったことについての金銭的な問題は、すでにYが説明したとおりだった。

「強引なことをして申し訳ない」とサーディクは幾度も繰り返し、ユミコはそのたび首を振った。今では財団職員のウィンディという女が原因だったのだとユミコにもわかる。サーディクはウィンディの手が及ばないよう、はからってくれたのだ。しかし相手の方がうわてだった。

「エレベーターの中で絡まれたときは、正直、ぞっとしました」ユミコは正直にそう言った。なにしろ密室で逃げ場がなかった。そしてなにより信じ難いのは、その密室からウィンディが消えてしまったことだ。

Yが発言の許可を求め、その時の状況を詳しく説明した。ユミコは「その通りでした」、といちいちうなずく。

「それは——女だったのだな」

Yとユミコはうなずく。あれはたしかに女だった。

「死神が仕えているのは、冥界王ではない、と？」

「ええ」、とY。

なんのことだろうとサーディクは胸中につぶやく。そして彼をもっとも慄かせたのは、女の名。シパド。

シパドが？

ウィンディを連れ去った？

どういうことだろう。

（ウィンディがいなくなってくれたとは、ありがたいに違いないが.....）

シパドに比べたらウィンディ・サトウなど小物もいいところなのだが、一難去ってまた

一難である。しかし、なぜ？

そこへ、サーディクのスマホが鳴った。「法務部長？」

ちょっと失礼、とつぶやいて電話を受ける。ソファを立て室内を歩きながら電話をかけるのは彼の癖である。しばらく相手と話してから、ソファに戻ってくる。

「Y、きみがエレベーター内で拾ったという USB だが」

「ええ、ウィンディの手から床に落ちたのです。『Legal』と刻印されていたので法務部に届けた、あれですね？」

「法務部長が保管庫に入れ、嚴重にカギをかけてあったものだそうだ」

「え！　すると、まさか、機密のデータの類いだったのですか！？　ウィンディはそれを！？」

法務部のドストエフスカヤ部長は気まずそうに言った。

「私の私物なのよ。中身？　趣味で書いた詩の数々」

302.

彼らは口をつぐんでそれぞれの方向へ視線を投げた。何が何やら、さっぱりわからない。Yはふと自分のスマホを取り出した。そういえば『ウィンディに気をつけろ』と云って来たのは桧山氏だ。すぐに了解した旨を送信したのだったがそれはまだ未読のままなのだ。Yは、漠然と胸落ちしないものを感じる。すると、サーディクも同じことを考えたらしく、「ケンに電話してみよう……」、と——した、その時だった。

突然——どん！　——衝撃があった。衝撃としか言いようがなかった。そして室内で大音響が鳴り響いた。ユミコは驚いて体をこわばらせ、Yは反射的に立ち上がっていた。サーディクはFと#Fの耳障りな和音が気に入らず顔をしかめている。耳障りなもの当然、それは警報だった。いやがうえにも神経を逆撫でする音がわんわんと鳴っている。

永遠に鳴り続けるかと思われたそれが突然、ふっ、と止んだ。静かになったと思ったら、照明が落ちた。非常灯に切り替わる。なにがあったんだ？　警報が鳴る前になにか衝撃があった。あれはいったいなんだ？

ユミコが小さく、落雷？　それとも、地震でしょうかとつぶやく。日本ほどではないが、ベルギーでも地震は起こる。

そこへ、館内放送が。館内警報システムが誤作動した。防火シャッターが降り、停電しているが、現在復旧作業中なので、その場を動かず、しばらくお待ちいただきたい、というのだった。

サーディクはちょっと胸をなでおろした。夏期ワークショップ中で十代の少年少女を三十人ばかり預かっている。機械の誤作動で済んでくれればいいのだが。

Yが玄関を開けて廊下を覗き、報告。「Xがさっき、何か云って来たんですが」彼らは小型のヘッドセット付きトランシーバーを持っている。「警報の音が大きくてよく聞き取れなかったんです。いないところをみると、シャッターが降りる前に外へ出たのかもしれませんが。それと——スマホが使えないようです」

303.

Xが立っていた廊下の高窓の外で、何かが光った。それは光の玉のようで、あっという間に、みるみる眼前に迫ってきて、なぜか胸騒ぎをおぼえ、これはただ事ではないと彼は思った。ちょっと外を見てくる、とYに通信しつつ、走り出したとたんだった、建物を揺るがす衝撃があり、警報が鳴り出したのは。音もなく降りてくるシャッターの下をくぐり、階段を駆け下りたところで誰かとぶつかった。割ときゃしゃなその人物はXに吹っ飛ばされる感じで壁に跳ね飛ばされた。

「——X～おまえか～」

「あ。すすすみません！」

Xが“はねた”のは、桧山健だった。

「お怪我は！？ 大丈夫ですか！？」

「大丈夫！ それより！ 急げ！！」

健は、はねられて壁に激突したショックでしばらく朦朧としていたが、頭を振りながら走り出した。

「どちらへ！？」

「バンケットホールの方だ、ひろはそう言っていた——」

「総裁！」本人は嫌がるとわかっていながらついそう呼んでしまう。「何があったんですか！」

「息子が誘拐されたんだ」

「なんですって——」

「されたんだが——」

Hostage rescue

304.

パウジーニはとにかく警察に通報すべきだといって譲らず、誘拐された子供の両親を説得しようとしていた。が、父親は言った。

「こっちが狂人扱いされるぞ」と。「これ以上の説明をすることは、オレにはできない」

「……なぜです？」

「これですべてだからさ」

「しかしですね……！」

パウジーニにはひどく抽象的な、というか物語的な話にしか聞こえず、現実におきた幼児誘拐とどう結びつくのか、まるでぴんとこないのだ。

「そうなのよ、パウジーニさん」母親がつぶやくように言う。「真を助けるには真の魂を差し出さなければならない……そういうことなのよ……」

「いやしかし La moglie del capo！」

実務者であるパウジーニは手をこまねくということが苦手だった。とにかく問題を整理し、打てる手は打つべきなのだというのが彼だった。

「私が思いますに——」と言いかけ、ふと口をつぐむ。

彼らは録音された通話を聞き返していた。パウジーニが情報をすべて詳らかにしてもらわないことには効果的な対処はできないと主張したからだ。

「ボス、ほら、このノイズ」

「ん？」

「この、ばたばた、ばたばたという規則的な低い音。なんだろうと思ひまして、ずっと気になってたんです、もしや、ヘリコプターでは」

「え……ヘリコプターのローターが回転する音？」

健は愕然とした。死神は空の上にいるということか。真も一緒に――

ひろがふっと顔をあげて「真――？」とつぶやいた。その顔は何かにとり憑かれたかのように、健は、と胸をつかれた。ひろはショックのあまり、精神が錯乱しかけているのかもしれない。

他動的な動きでテーブルに手をつき、立ちあがり、「真が――帰ってくるわ」とさらにつぶやく。目が底光りしている。「ひろ」、と健は妻を落ち着かせるべく、肩に手をかけようとしたが、ひろはその手を無視して、ずいっと動いた。顔を仰向かせ、ぐると宙を……天井を……視渡す。そして「バンケットホール！」と。ぱっと目に光がとまり健の両手の間をすりぬけて玄関に走った。

「ひろ！！」健が叫ぶ。

「ボス！ おくさまを！ 追いかけてください！」

「しかし電話が――」

「電話を待つ必要がなくなったとしたら！？」

パウジーニの言葉の意味が呑み込めない。秘書はイライラと言葉を継いだ。「誘拐犯は人質を失ったのかもしれませんが！！」

廊下を走る間に、全館を警報がつつんだ。非常事態……セキュリティが破られたのだ。

305.

どこからどうやって調達してきたものか――

死神は軍用ヘリを小手先で操っていた。乗務員はひとりもない。すべて彼の魔力によるものだ。

選んだ理由だけははっきりしている。足が速いからだ。

誰もいないコクピットで操縦桿が勝手に動いている。

飛行を制御する機器もまた勝手に動いているが、通信機器はとうに切ってある。「操縦士は誰だ！？」「行く先はどこだ！？」「飛行目的を言え！！」とひっきりなしにうるさかったから。

人質の父親を電話でたっぷりからかった後で、死神は上機嫌で北欧の空の旅を満喫しようとしていた。緑深い地上、雲間から射し込む陽が眩しい。

（あーやだやだ、太陽なんて！）

陽光を浴びずに済むよう、機首を東へ巡らす。ヨーロッパの入り組んだ国境線のことなど、ちらりとも考えなかったし、手下のウィンディの無事さえ気にならないようだ。

306.

イリチャは人間の形態でヘリの上、後方からそっと近づいた。回転翼に触れないよう、横目で伺いながらすばやく側面に回りこみ、いつとき物質形態を解いてヘリの機体を通り抜けて内部に潜り込む。

真の身に異変が起こり、健が隠そうとしていることなど、とうに察しがついていたから知らないフリをしていた。

ヘリは軍用だから中はもちろん、居住空間などというしゃれたものはない。真は後部のがらんとした貨物室に放り込まれ、床に転がされていた。

（五歳の幼児にこれはないんじゃない！？）イリチャは思わず目を吊り上げる。

（真は思いきり甘やかされた箱入り坊やだってのに！！　これで六時間も保つわけないだろ！？　どんなに我慢したって十分がいいとこさ！　もうちょっと、こう……おやつを用意してあるとか……待遇考えてくれてあったら、ぼくだってそれなりに手加減するんだけどね！　これはあんまりだ！！　おぼえてろ、ベネトナシュ！！）

物質を凝固させ、人間形態を固定させる。本体を外へ連れ出すためだ。

（これだと力がかなり限定されちゃうけど、しょうがないや）

それは本来、実体をもたない死神にとっても同じはずで、力の限定はお互いさまといったところだ。

軍用ヘリで悠々と遊覧を楽しんでいる死神の背中を見ながら床近く、姿勢を低くして伏せ、（真……！）と呼ぶ。（こっちへおいで！　そっーと！）

びくっと飛びあがった真の目をとらえ、掌を上に向け、指を動かして、こっちへ、と招く。

真はコクピットを気にしながらそろそろと四つんばいになり、そろそろと這ってきた。薄手のシャツの襟の間から細いのだ元がのぞいていて、アザが見える。ベネトナシュがいちど力任せに首を絞めた、指の跡だ。「声をだすんじゃないよ」と言って。

真は相手と額をつき合わせて（——だれ？）という顔をした。
真の真っ黒な目をしっかりとらえて伝える。（むかえにきたんだ。かえろう。パパがまってる）この子にはこれがいちばん効く、とイリチャは知っている。
真は自分より少し上にある相手の目をまじまじとみた。黒や灰、青、緑のは知っているがこういう紅い色は初めてでものめずらしくもある。相手は唇の片方をちょっともちあげて微笑した。
それをみて真は（パパとおんなじ笑いかただ）と思った。でも……（ぼくをむかえにくるのは、ぼくが知ってるひとだけだよ）
ようするに、知らない人についていってはいけないということだ。

イリチャは微笑したまま言った。（おまえはぼくをよく知ってる）
真は抵抗するように首をちょっと傾げる。
（ぼくはおまえだ）つき合わせていた額をくつつける。

＊

（な？）
（——うん）
（おまえはあの黒いやつにひどい目にあわされたら？　でも泣かなかった。えらいぞ）
（ぼくは泣かない！　だって男の子だもん）
（よし。いいこだ）
いいながら真の首筋に手をまわし、赤黒いアザを消してやる。人のいい両親たちはこんなみにくいものをみたら卒倒してしまうだろう。
（さ。かえろう。みんな心配してる）
そっと額を離し、体を起こそうと動きかけたとき、上からなにか降りてきた。

＊

「まあ待ちたまえよ」

イリチャと真の間の床にカマの刃が突き刺さっている。コクピットをカゲのようにすり抜けた死神が間近に立って、見おろしていた。

307.

「——さっそく真打がご登場とはねえ！　ま、こんな不細工な乗り物を選んだのはその為なんだな、この世界の人間は自力で空を飛ぶことができない。人質を空にひきあげてしまえば、追ってこられる人間はいない。それができるのは、キミだけなのさ」

「.....」

「クククククク.....今頃地上じゃあ、みんな右往左往してる。肝心の人質とキミとはここにいて身動きとれない。H&Lとかいう目障りな団体が醜聞にまみれるのは時間の問題。どうだい、一石二鳥、すばらしい計画だろう？　クククククク.....」

「人質とぼくはここにいるけど、H&Lがどうとかいうのは、なんのこと？」

「うんうん、それはとてもとても込み入った計画でね、全貌を知るには第二十八章あたりまで遡ってもらいたい.....なんだい、なにを笑っている.....！？」

「いや、べつに」

死神ははっとして内ポケットからなにか引っ張り出した。

「——！　——これじゃない！！」本機と受話器が螺旋コードでつながった大きな黒電話は放り投げる。「——こっちだ！！」

オシャレなデザインのスマートフォン。桧山正弘のだ。

ホネの指の先で操作してしばらくしてからきろりと目を動かした。

「データがいくつも消えてる——まさか、キミが——？」

「.....」

「正直に、答えたまえよ——」

「——その機械から出たデータ——ひとつはヨーロッパの某三流通信社へ、ひとつはこの子どもの母親へ当てた、そうだろ？」

「——」

「機械は盗品、データも盗撮したもの、正当なものはなんにもない。だから消去した」

「——どうやって」

「べつに、おまえが知る必要はないんじゃないの？　　だけど、あんな動画がなんでH&Lの醜聞になるの？　　教えてくれないかな」

「それは——キミが知る必要のないことさ」

308.

「なるほど？　　何かあるんだね？」

「……」 あることないこと言を弄するのが大好きな死神が、口をつぐんで目を光らせている。

「じゃあ、ひとまずこれまで、かな。続きはまた今度」

「——あいたたっっっ！！　　ナニをする！？」

いきなり足払いをかけられて死神はみごとに仰向けにひっくり返り、操縦席のヘッドレストにしたたか後頭部をぶっつけた。

「不意打ちとは卑怯なっっ！！」

足払いの体勢から死神のふところにするりともぐりこんだイリチャは桧山正弘のスマホをぱっと取り返してしまった。

「あこらまでどろぼう！！」

よいしょと真を抱き上げ、イリチャは貨物ハッチをちらりと視認する。

「とにかく返してもらおうからね。冥界王にはまあよろしくいって——」

言いながらハッチを思いきり蹴った。数値にすれば数値はあろうかという蹴りに頑丈な軍用ヘリのハッチはロックごと壊れてあっさりと口を開けた。

「待て！！　　逃がすか！！」

いきなり生じた気圧差に外へ吸い出されそうになりながら、ベネトナシュは妙な形のかぶり物を飛ばされまいと必死にふんばる。

真にしっかりつかまっているように言い聞かせ、壊れたハッチから外へ脱出しようとした、その時だった。

ハッチと反対側の窓の外で火花が飛んだ。そして機体を揺さぶるような気持ちの悪い衝撃と、金属を小さく重いものが叩く、低い連続した音。

くらくらと傾いた機体の床を懸命に踏みしめてイリチャは真の頭越しに窓の外を見た。窓の向こうに——

別のヘリがいる。

機体の下に火器の砲身があり、その銃口がこっちを向いている。

（——銃撃——！？）

陽光を眩しくはじく天蓋の内部に操縦者のシルエットがある。操縦者は片手になにか持ち、口をよせ、しきりに口を動かしていた。

「ベネトナシュ！！！」イリチャは思いきり声を張り上げた。

「通信機は！！？ スイッチを！！！ 早く！！！ 外から警告されてる——！！！」

警告はすでに幾度もされていたのだ。ベネトナシュのヘリがブリュッセルから欧州大陸を東へ向かい、隣国との国境に近づきつつある時から、すでに幾度も。

レーダーで追跡され、警告され、威嚇までされていたことに——気がつかなかった！

「撃つなと言え！！ 早く！！ 子供が乗ってるんだ！！」

しかしベネトナシュは、イリチャの真を抱きかかえていない方の腕を掴むのに忙しかった。

盗まれ国境を越えようとしているヘリに、死神の形をした黒い影がとり憑いていた。

そのおぞましい様をみることができたのは、おそらく、操縦士が敬虔な人間だったからだ。

歯を食いしばっても悲鳴は勝手に迸り出る。

十字を切り、神に祈り、多大な恐怖と若干の職業的義務感と軍規から、操縦士は引き金を引いた。引き続けた。

あとがき

え〜。ずっと携帯電話という単語を使ってきましたが、今回から『スマホ』に統一することにしました。変更するタイミングがつかめなかったんです。だいたい、筆者はPC使ってることが多くてスマホの必要性をあんまり感じないものでして、SNSはできるだけ見ないようにしてるし。なぜかアタマが痛くなる。でも連絡手段としてはすごい便利。これも時代というものでしょーか

2026年8月17日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十一章 Hostage rescue

2026 年 8 月 18 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラストA C」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

リ・コンストラクション-31

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
